

【『琅』四十四号・あとがき】

昔、「明治は遠くなりにけり」と詠んだ俳人がいた。遠くから伝えられて来る異変に、また、日々の生活で出会う些細な出来事に、時代の曲がり角を実感する昨今である。異変の一つは、地球の温暖化である。それは、今や温暖化といった生やさしいレベルではなく、沸騰化だという人もいる。温室効果ガスのもたらす温暖化は、極地の氷を溶かしてそこに住む生物の生存を危うくするだけでなく、溶けた氷は海水面を上昇させ、大洋に浮かぶ島国では、国の存続そのものが危うくなってきた。温暖化の影響は、島嶼国家だけではない。カナダやオーストラリアでは、干魃や高温が原因と見られる大規模な山火事が起きているし、北アフリカの、砂漠地帯とされてきたところで大規模な洪水が発生し、多くの死者・行方不明者が出ている。

この夏、我が国は未曾有の猛暑に見舞われた。「記録を取り始めて最高の・・・」という表現を何度耳にしてきただろう。そして、酷暑が続く一方で、一度降り始めれば、「数十年一度」の雨量となり、「命を守る行動をとるよるよる」との警報を聞いてもさほど驚かなくなったが、考えようによっては、この警報は、その言葉以上に恐ろしいものを含んでいるように思う。そうした「数十年に一度」が毎年、あちこちで起きているのが現実である。

我が国は、四季に恵まれた温暖な国ということだが、果たして、いつまでその恩恵に浴すことができるのだろうか。自然現象だけではない。第二次世界大戦が終わって七十年、時に、「平和ボケ」と揶揄されるくらい、私たち日本人は、直接的には戦争とは無縁の生活を営んできた。世界情勢に疎い筆者は、ベルリンの壁の崩壊（一九八九年）やソ連邦の崩壊（一九九一年）を見て、これで東西を隔てる壁は限りなく低く、薄くなっていくものと期待したのだ

いや、週刊誌だけではない。今や、車内で新聞をあげる人も見なくなった。かつて、向かい側の席で広げたスポーツ紙のグラビア頁がこちらを向いていて、思わず目が釘づけになるようなこともあったが、これからは、そうした思わぬ楽しみ（？）は経験出来なくなるのだろう。スポーツ紙の発行部数がどのような状況になっているのか正確なところは知らないが、オオタニ頼みだけでは、行き先はたかが知れているように思う。

ことはスポーツ紙だけの話ではない。個人的な話で恐縮だが、我が家の二人の子どもは、それぞれ結婚して独立した家庭を営んでいるが、両家とも新聞を取ってはいない。彼らが利用する情報のほとんどはネット経由であり、その方が早くて経済的ということらしい。彼らにしてみれば、親父たちがどうして新聞を取っているのか、その理由が分からないということようだ。聞かれても、「新聞にはテレビ番組があるから・・・」という程度の答えしか浮かばないのが、何とも情けないところではある。

余計なことと言われればその通りだが、新聞がいつまで現在のような形であり続けられるのか、絶滅危惧種に近い定期購読者としては心配になる。

筆者は、人に誇れるほどの読書家ではないが、活字人間（老人？）だとは思っている。かつて書店は、わが憩いの場所の一つだったが、最近、すっかり足が遠のいている。それは、出不精になったせいだけでなく、書店自体に楽しみがなくなってしまうからだ。ネットを使えば、欲しい本が居ながらにして、確実に手に入るといふことのようにだが、本屋は、欲しい本が決まっただけ、それを求めに行くだけの所ではなかったはずである。

そのような筆者が、どこで「活字欲求」を満たしているかという点、昔購入した文学全集ということになる。筆者の学生時代には、「文士」と呼ばれる人たちが活躍して

が、それは無知故の甘い期待だったようだ。

筆者は、高校時代に習ったヴォルテールの言葉、「私はあなたの意見には反対だ。だがあなたがそれを主張する権利は命をかけて守る」を、人類の普遍的な叡智と受け止め、世の中は、誰もが自由に物が言える世界に向かって進んで行くものと思っていたが、今やこうした意見は少数で、自分たちの考え以外は認めないとする体制が多数派になりつつあるというのである。

北と南、東と西というレベルだけの問題ではなさそうだが、世界の民主主義の雄とされてきた国でも、「分断」が心配されている。それは一人の乱暴者が出現したからではなく、そういう乱暴者を担ぐ大衆があるということなのだ。

他方、身近でも、ひたひたと変化の波が押し寄せている。今年の春、「週刊朝日」が休刊になるという知らせを聞いた。休刊ということだが、実際は廃刊だろう。この週刊誌の愛読者だったわけではないが、このニュースを聞いて、一つの時代が終わろうとしているように感じたのである。

学生時代、よく読んだのは、同じ発行元の「朝日ジャーナル」の時代ではないが、当時の学生の一つの姿勢、一種のファッションだったような気もする。三十年ほど前、その「ジャーナル」が廃刊になると聞いて、一つの時代の終わりを感じたが、そのときは、私の青春時代が遠ざかっていくような個人的な意味合いが強かった。しかし、「週刊朝日」の休刊には、それとは違った意味合い、一言で言えば、出版文化の現状が象徴されているように感じたのである。

たまたま電車に乗って、向かいの七、八人がけのシートに座った全員が、スマホを操作しているのを見て、特別なこととは思わなくなった。その一方で、駅の売店（ああ、これはキオスクと言うのだった！）で週刊誌を買って車内で読む人を最後に見たのはいつのことだったろう。

だが、今や、すっかり影を潜めてしまった。本誌の「文学館散歩」でお世話になってる現代日本文学大系（筑摩書房）は昭和四十年代前半に配本が開始されている。その頃は「文士」たちも健在で、ときに「文士芝居」の余興もあった。そして、あちこちの出版社から、いくつもの文学全集が刊行されていた。紙離れ、活字離れが進む昨今、漱石や潤一郎、川端、三島、大江らは、これからのどのような形で生き延びて行くのか気になるところである。それにも増して、彼らの後を継ぐ作家たちが誰なのか、名前も聞いても、それを覚えられないのが悲しい。

文学よりずっと私たちの身近にあった歌謡曲も姿を変えようとしている。本同人誌の生みの親である宗内敦氏は、創刊間もない本誌に「演歌つれづれ」と題して、氏の青春・壮年時代の生き様を、当時の流行歌に重ね合わせて活写したが、それは、まさに「歌は世に連れ」と言われた幸せな時代の産物だったとも言える。歌詞に物語があり、それを乗せるメロディーは、日本語の抑揚の邪魔をしないので、歌詩が耳に馴染み、いつまでも心に残るのだった。そして、何よりも大事なことは、物語が、その時代を生きていた人たちに歌によって、共有されていたということだろう。まさに、「世は歌に連れ」ていたのであった。

テレビから、歌番組が消えて久しい。残っているのは、昭和の懐メロ番組くらいではないか。最近の歌が、作り手のための歌になってしまい、聞き手のためのものではないように感じるのには私だけだろうか。どんな芸術も、他者のためではなく芸術家自身のための行為の結果だということなら、仕方ないことかもしれない。しかしながら、流行歌を通じて、会ったこともない人との間で連帯感のようなものを味わって来た団塊世代としては、「昭和も遠くなりにけり」の言葉が、つい口をついて出てきてしまうのである。

（茂治）